

# 経済評論

●—目次

●コンメンタール・レギュラシオン

レギュラシオンの経済学から政治学へ……………A.リピエッツ 平田清明訳 2  
——ナショナル・クライシスへと転落する一國的開発主義

●寄稿

「道具的理性」の限界と経済学……………小出厚之助 25

現代資本主義の再認識……………凌 星光 54

「ケインズ研究」で私が論じたこと、論じなかったこと……………平井俊顕 36

●新連載

都市商業集積政策序説  
商業集積分析の方法……………杉岡碩夫 88

●連載

歴史的転機のハンガリー改革  
ポスト・スターリン時代の経済改革……………盛田常夫 68

●資料

EC市場統合下での自由、公平、連帯の新しい  
社会の創造(III)……………柴山健太郎 99

——ドイツ社会民主党の新しい基本綱領草案

日本経済ミニ・スコープ  
またも援助哲学の不在が……………S・N 50

企業人からの発言  
古い商慣習と合理性のはざま……………X・Y・Z 52

経済学文献月報……………大阪市立大学経済研究所 130

日本評論社

# 経済評論

The keizai hyōron 昭利27年4月23日第3種郵便物認可  
1989年9月1日発行(毎月1回1日発行)第36巻(通巻44巻)第9号

レギュラシオンの経済学から政治学へ

——A.リピエッツ 平田清明訳

現代資本主義の再認識——凌星光

「道具的理性」の限界と経済学——小出厚之助

「ケインズ研究」で私が論じたこと——平井俊顕

歴史的転機のハンガリー改革

ポスト・スターリン時代の経済改革——盛田常夫

都市商業集積政策序説

商業集積分析の方法——杉岡碩夫

日本経済ミニ・スコープ

またも援助哲学の不在が——S.N.

企業人からの発言

古い商慣習と合理性のはざま——X・Y・Z

ドイツ社会民主党の新しい基本綱領草案——柴山健太郎

経済学文献月報——大阪市立大学経済研究所

# 9

1989 September

日本評論社

コンメンタール・レギュラシオン ②

# レギュラシオンの経済学から政治学へ (1)

A・リピエツツ  
平田清明 訳  
パリ第4大学教授  
神奈川大学教授

——ナショナル・クライシスへと転落する一国的開発主義

## 要約

この大会報告において私は、ヘゲモニー・ブロックヤソシエタル・バラダイムといった、フランス・レギュラシオン・アプローチの幾つかの新しい概念を政治学のなかに導入する。次いでそれら諸概念を、一九六二年から一九八七年にわたるフランスの国家と経済の諸関係の研究に援用する。そうすると、逆説的なのだが、次のことが判明する。すなわち、現行の「フォードイズムという」経済発展モデルに関するコンセンサスは、「イデオロギーの終焉」が叫ばれる今日においてよりも却つ

て、「イデオロギー上の」対抗の激しかったあの時期（一九六〇年代）においてのほうが強固だったのであった。国家による強力な育成の結果生まれたフランスのフォードイズムの展開は、それに見合ったヘゲモニー・ブロックが欠落しているため、その発展が弱められている。この弱さは、七〇年代以降、フォードイズムの国内のおよび国際的危機を、左右いずれもの相次ぐ政府が、管理できないでいる、ということに表れている。

「一つの国民は、一つの魂であり、一つの精神的原理である……。一つの国民は、一つの過去を前提するのではある

が、しかし、ある一つの明確な事実によって、現在のうちに凝縮して存在している。その事実とは、共同の生命を持続させようとする合意であり、そうしようとする明示的願望である。一つの国民の実存は、日々なる人民決議 *plébiscite* の賜物にほかならない。」

エルネスト・ルナン

一九八八年四月二四日、つまり大統領選挙の第一回投票で、フランスはいつものように真つ二つに割れたが、今度はさらに三つに割れた。左翼では社会党（三四％）の立候補者が、他方の右翼にあつては、前国会多数派（これ自体が二〇％と一六％と二つに割れていた）の立候補者が、一つの中核的地位を争ったのであるが、それは、技術の近代化とヨーロッパ統合を除けば、大衆獲得のプロジェクトをほとんど欠いた状態のままでおこなわれた。そして、三つに割れたうちの第三のもの——これは、政治の扇の両極端に引き分けられているものなのだが——は、魂を欠くとうしたコンセンサスは御免だ、と叫ぶのであった。左翼の側では、諸勢力がバラバラに分散し、そのなかで共産党が、七％に落ち込み結党時の得票を辛うじて維持した反面では、同じ比率の票が、オートルタナティブ派とエコロジスト派に分れて出た。そのうえ極右では、あのルベンが、一四・五

％を獲得した。恐怖と排除の党、人種的憎悪と不条理的幻想の、この党派が、これだけ獲得したのだ。ドゴール主義の安定化政策に続く四半世紀は、植民地戦争の終結と近代化の大躍進の時期ではあったが、「イデオロギー上の」大論争が消えて、フランスの政治舞台は思慮深くなったと信じられるようになっていたのであるが、実は、極めて重大なフランスのアイデンティティー危機を露呈するものなのであった。

国防や国内諸組織、また国家の重みといった「大問題」をめぐって、一九六五年の大統領選挙時に二大陣営を分けたあの騒然たる声は、かき消されてしまっている、と強調することはもちろんできる。しかし私はそう思わない。一国民の統一を形成する「日々なる人民決議」については、その基礎的コンセンサスは、あの時期つまりドゴール主義者の管理していた成長の形態とテンゴに対して強力な左翼勢力が抵抗していたあの時期の方が、むしろ強かった……。今日みられるのは諸々のイデオロギーの沈黙であるが、それらのイデオロギーを、人種主義的で自分勝手なイデオロギーが粉砕しているのだ（しかもなんという力だ）。このイデオロギーの沈黙は、積極的な合意を表わすどころか、逆に基礎的諸価値についての共同コンセンサスの欠如を示している。したがってまたそれは、不確定な二次的差異を測る尺度に関する共同コンセンサスの欠如を示しているだけ

である。「旧きものが死に、新しきものは未だに目の目をみるに至っていない、この黄昏に、妖怪が徘徊する」とグラムシは語っている。

かくも深刻な危機をここで解説してみせると述べたところで、空しい繰り言にすぎないだろう。このシンポジウムの精神ならびに私に与えられたテーマに即して私がここに提起しようとするのは、ただ幾つかの方法論上の用具なのである。そしてまた、それら諸用具を私は、ごく限定された国家と経済の諸関係の領域に、しかもそれら諸関係の国内的国際的諸ディメンジョンに、質的に例示しようとするものである。

議論を簡単にするために私がまず第一に導入しようとするものは、「フランス・レギュラシオン学派」と呼ばれるようになったものから引き出される方法概念上の諸仮定である。私は数年来それら諸仮定を、経済の領域を越えて拡大させようとしてきた(1)。第二、第三部では、再び質的な例示法で次のことを表わそうと思う。すなわち、合意を相対的に形成する体制から多数のディメンジョンを持つ危機への移行を、いかにして、それら諸概念が照らしうるのか、ということがそれである。しかも、この危機が持つ多数のディメンジョンのうち、私は社会経済的諸側面だけを開示する。より正確に言うと、私が研究しようとするものは、まず第一に、「死んでいる旧きもの」(それ

は、戦後の「黄金の三十年」を支配したものである)とは何であったのかということであり、次いで私は、危機に至る諸種の理由と文脈とを研究する。そして最後に、危機からの脱出の試みとその相次ぐ挫折とを描き出し、それらが今日の深刻な混乱に通じている、ということを想起させるだろう。

#### I 国家と経済を研究するための若干の用具

「国家と社会の諸関係」あるいは「国家と経済」といった問題は、どんなタイプの社会でも、同じように提起されうるものではない。こうした問題が提起されるには、少なくとも次のことが必要である。すなわち、経済の圏域が「市民社会」から広範に自律していること、さらにこの経済の圏域が、特殊に政治的とみなされる社会的な権力諸関係を、つまりノルムや法律の形成、「合法的暴力の独占」といったものを、己れ自身の外部に、いわば隔域化していることが必要なのである。資本主義的市場経済の場合がまさしくそれであって、そこでの生産組織は、賃労働者を徴募し商品売る諸企業の所産なのであるが、一九六二年のフランスの場合には、それに、小商品生産部門、つまり独立生産者の部門が加えられなければならない。この部門は、農業ではほとんど専一的であり、商工業では広範に普及

していたのであって、「当時のフランスにあっては」依然として極めて重要な部門をなしていた。これらすべての生産形態にあっては、女性の家庭労働は目に見えず、代表されておらず、さらに「経済的」でないとさええられてきている、ということにも注意しておく。

しかし、この資本主義的な市場経済の場合でさえ、政治と経済の区別はそれほど明らかではないのであって、これはすぐに気づくことである。商人、資本家そして賃労働者といった諸アクターのあいだの媒介は、貨幣を通じてなされるように見えるのではなく、自分の富に対するそれらの諸主体の所有権や、貨幣そのものの存在といったものは、政治の領域での制度化された妥協を前提しているのだ。企業の内部そのものにおいて、労働ならびに報酬の諸条件をめぐる闘争は、一つのミクロ・ソシアルな政治形態であり、しかもこの政治形態はそれ自身、経済外的な政治圏域の枠内に収められていっているものである。簡単化のために今後は、この経済外的な政治圏域を、「政治圏」(と出しているのだが)と呼ぶことにしよう。

資本主義的商品経済はさらに、小商品生産部門に連節しているのだが、その再生産は、おのずからに遂行されるのではない。生産の諸条件が変革するのだ。所得分配の諸条件も変革す

る。同じく、生産物の社会的利用法をどうするかを選択もまた変革する。それにもかかわらず、それら諸変革が長期にわたって両立しており、蓄積や経済成長が重大な動揺を経験しないということができる。相互に結合し両立した生産・分配ならびに利用法の諸ノルムのこの変革様式を、我々は「蓄積体制」と呼ぶ。この蓄積体制はそれ自身、労働組織と技術利用の一般諸原則に基礎を置くものである。この労働組織と技術利用の一般原則のことを、テクノロジカル・パラダイムと称することができる。

それゆえ蓄積体制は、異議申し立てを受けたマクロ・エコノミックな規則性を示す。この規則性は、そのものとして、投資家をはじめとする諸種の経済主体にとって、貴重なガイドとなる。それは、テクノロジカル・パラダイム遂行可能性や経済成長の予測、また日々の価格や市場の変動といったものを大雑把に体験する彼らにとって、たしかに貴重なものだ。しかし、彼らが体験するそれら諸変動要因の総体が、将来に向けて首尾一貫たりうるか否かについては、彼らのイニシアティブは根底的な不確実性の脅威にさらされたままである。したがって、制御調整メカニズムが介入しなければならなくなる。我々が「レギュラシオン」(制御調整)様式と呼ぶものは、この蓄積体制総体のロジックに、諸個人の子測と行動をつねに順応させるところ

の、身体化され明示化された諸ノルムや諸制度、また、そのように諸個人の子測と行動を順応させる補償機構や情報装置などの、総体である。これらのレギュラシオン諸形態は特に、給与表の確定、企業間競争の様態、貨幣と信用の創造機構に関わるものであるが、より多くの細部については、現代フランスの事例を通じて示すことにする。

それゆえレギュラシオン様式とは、均衡のとれた再生産と蓄積との諸条件が根本において遵守されるように、作用主体たる諸個人が導かれていくところの「様相」、「実践」(慣習的行動)、「表面的な「地図」をなすものである、ということができる。このレギュラシオン様式の布置は、いわんやその強化は、政治圏の如何に左右されることがきわめて多い。市場も資金契約も、貨幣や所有権を創造しうるものではなく、またそれらを遵守させうるものではない。まして、社会保障制度を創造することはできない。我々はだから今、政治的社会的な闘争と「休戦」の場に、つまり制度化された妥協の場にいるのだ。

こうした政治の場における闘争、休戦、妥協は、競争や労使対立そして蓄積体制が経済の領域において果たしているところのものと、等価をなすものである。日常の生活諸条件によって、とくに経済的諸関係内での地位によって規定されている社会諸集団は、終わりのなき闘争に身を捧げるわけにはいかない。

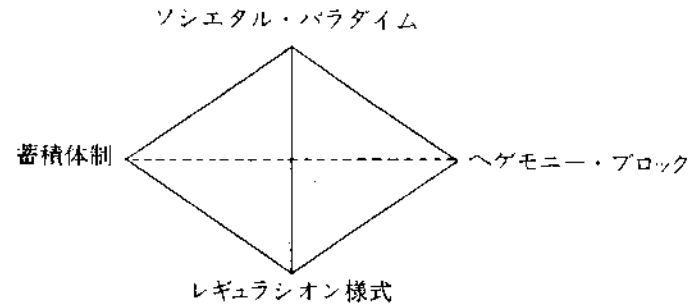
ばならない被支配者集団に対してなされるのであって、もしそのことを欠くならば、そこには合意ではなく、暴力の日々なる行使があるのみとなってしまうであろう。一つのヘゲモニー・ブロックにあつては、その利害がまったく考慮されない国民部分というものは、きわめて少数であらねばならないのである。

ヘゲモニー・ブロックが構築され、再生産されるのは、種々な利害の得失がかかった合意に基づくのであるが、その利害が経済的な利害である範囲において、我々はそこに、「ヘゲモニー・ブロック」、「蓄積体制」そして「レギュラシオン様式」の緊密な三者構成を見出すのである。ヘゲモニー・ブロックの再生産の条件ないし基礎は明らかに、このヘゲモニー・ブロックにおいて、利害関係者(被支配者集団を含む)が承認する条件内で社会的必要を満たす諸条件を創出することのできる蓄積体制が実存している、ということである。だがこの蓄積体制の現出は、レギュラシオン様式の如何に左右されるのであり、このレギュラシオン様式はまた、ハビトゥス(3)と、運動そのものにおける制度化された妥協との、一総体にはかならない。ヘゲモニー・ブロックが確立するのはまさしく、この運動を通じてなのであり、またこの運動は、制度化された妥協をこのブロックそれ自身が支持する限りにおいてのみ、存続するのである。しかし、満たされるべき適法的な「諸利害」は、どのように

それら集団間での利害の相違や条件の不平等がどれほど大きくあろうと、それらの集団は、広大な時間の流れをつうじて、その権力諸関係が致命的な異議申し立てをうけずに永続するところの一国民を構成するのである。我々が社会的・ブロックとよぶものは、諸種の(支配的および従属的)社会諸集団間における支配諸関係、諸同盟、諸譲歩のある安定したシステムである。そしてある社会的ブロックがヘゲモニーを確保するのは、このブロックが自己の組織装置を、国民全体の利益に合致したものと国民全体に認知させた時にほかならない。だから、ルナンの言う「人民決議」は、日々暗黙のうちに絶えずなされているのである。

一つの社会的ブロックには明らかに、平等でない諸種の地位がある(2)。支配者集団は、彼らの基本的な利害と彼らなりの経済社会的発展概念を押しつける。同盟者集団は、指導的な役割を果たすわけではないが、それでも、このブロックのヘゲモニーのうちに基本的な利益を見いだすことができる。「中継者集団」は、極めて従属的な地位をしめながらも、このブロックが提起する総括的な妥協の卓越さを、彼らの生活様式において、また彼らに託された権限の行使を通じて、誇示するということが必要不可欠な役を演ずる。こうした誇示はとくに、最も利害の満たされない最下層の、だが何らかの仕方考慮に入れられね

定義されるのだろうか。また、ヘゲモニー・ブロックを編成させる諸種の妥協の有効性と適法性とは、どのようにして測定されるのであろうか。一ブロック内で闘争している諸集団は、このヘゲモニー・ブロックの名において「正義」を要求するものであるだけに、このことが問われる。ここで、《政治的な表象・言説の世界》(ジェイソン(一九八六))、つまり、諸個人・諸集団が自己を再認識し、自己のアイデンティティーおよび利害を、さらにまた相互間の差異を表明することがそこにおいて可能となるところの、《政治的な表象・言説の世界》が前提されねばならないのだ。この世界の定型化がどのようにおこなわれるかに、ヘゲモニー・ブロックの可能性そのものがかかっている。この《政治的な言説・表象の世界》内で適法的に擁護されるアイデンティティー構造の様式を、我々は「ソ・エタル・パラダイム」と呼ぶ(ここでは単に、パラダイムと呼ぶ)。あるパラダイムがヘゲモニーを確保するのは、圧倒的に大多数な個人が、その社会に自分が帰属しているものと認めるときである。つまり、彼らがその社会から利益を期待し、それに対する義務を自覚するときである。こうした紛争的でありながら過程をへて、ヘゲモニー・ブロックは再生産されるのである(1)。我々の「三者構成」は、次のようなピラミッドになる。



上に述べたようなアプローチを、マルクス主義的ないし個人主義的な還元主義の伝統から区別するものが何であるかは、すでに見たところである。まさにこの還元主義こそが、商品・賃労働経済の「普遍法則」によって一義的に規定される諸利害の作用主体にとって、伝統となるものなのである。この利害といえは、それは、見渡せる限りでの諸種の力関係（これ自身がまた、所有・財産の本源的配分によって規定されているのだが）のもとでは、多かれ少なかれ不平等な権力と所得の或る均衡のうちに、自らを解決していくものなのである。資本主義経済は必ずしも同じように機能するのではない。そ

れは異なる様式で他のすべての生産形態と連節することができる。諸々の作用主体が諸種の経済関係のなかに入り、そこで行動する様式は、レギュレーション様式の如何に、つまり時とともに変わり、国によっても異なるレギュレーション様式に左右されるのだ。そして、レギュレーション諸形態を永続させる政治的均衡や明示的ないし黙示的妥協は、それ自身が、歴史展開の成果であるヘゲモニー・ブロックの表現にはかならない。要するに、諸々の個人や集団が、ある不確定のヘゲモニー・ブロックの内部で、自己のアイデンティティーと利害に思いを巡らす様式は、それ自体、イデオロギー闘争の産物であり、争点でもあるところの永続的な文化的発明なのである。我々のピラミッドにある四つの頂点は、それぞれが、思わざる発見なのであり、それら四者が一つのピラミッドの中で相互に整合するとき、それを我々は「経済社会的発展モデル」と呼ぶことができる。そしてこのことがそれ自体、準奇跡 quasi-miracleなのである。これら四者がひとたび凝集するならば、この凝集は、ますます強化されていく方向性をもつものであり、これについては「事後的機能主義」を語る事がゆるされるであろう。しかしこの凝集は一方で、このモデルに固有な諸矛盾によって、他方、このモデルから「離れて」いるもの、「離れて」発展するものによって掘り崩されているのであり、さらにこのモデルそのもの

によって無視され、あるいは押し潰されているのである。

かくして、我々の目には、二つの闘争形態が現われてくる。

\* 同じパラダイム内での闘争。つまり公平を巡る紛争、あるいは同じことだが、蓄積体制の内部でヘゲモニー・ブロックによって保障されていると見られる相互利益配分の現実を巡る紛争。この闘争は、「侵害」や「変則」、さらには「遅れ」と感じられるものに対して組織されるのであり、制御調整メカニズムの実施ないし完成化に狙いを定めている。

\* ヘゲモニー・パラダイムに対する闘争。この闘争は、もう一つ別のパラダイムの名において、つまり他のいくつかのアイデンティティーや利害の名においてなされ、また社会における、もう一つ別の生命観——過去のものであれ、未来のものであれ——の名においてなされる。こうしたもう一つ別のものの中には、もう一つ別の蓄積体制と他のいくつかのレギュレーション諸形態が含まれ、そしてもう一つ別の社会的ブロックがそこに接合する。

したがって、(毎年)のストライキ闘争や選挙闘争のタームでの(紛争)のあからさまな激しさは、それ自体で基礎的コンセンサスの弱さを示すものではない。というのは、その闘争は、第一のタイプのものでありうるからである。逆に言えば、要求獲得動員を欠いた政治諸勢力間の見え見えの合意は、権利として要

求することが正当であり適当であるものについての、端的に言って、権利として要求しうるものについての目印をただ全く欠いている、ということを示していることがありうるからだ。かくして社会の本性が空無を恐れるが故に、妖怪が突如姿を現すのだ……。

国家とは何か。もし国家とは、「社会を構成する諸集団が終わりなき闘争の中で焼き尽くされないように、社会が自らに備えた装置」(5)であるとするならば、国家とは、あのピラミッドのすべての極点に、多かれ少なかれ現存するものなのだ。つまり、

——蓄積体制の利害関係者として(徴税、生産活動、歳出を通じて)、

——経済的な制御調整の直接の形態として、あるいは若干のレギュレーション諸形態の保証者として、

——ヘゲモニー・ブロックを構成する諸種の妥協を(ある時には強制的に、また「適法的」にも)凝縮させ管理する場として、

——ヘゲモニックなソシエタル・パラダイムによって形状をあたえられる《政治的言説の世界》を表現する場として。

こうしたものが(控え目にみた)国民社会に対する国家の

「諸機能」であり、ドゥロルムとアンドレ<sup>(6)</sup>が「内部国家」と名づけたものである。この内部国家は、経済の圏域に対して、程度を異にして「隔域化」され、または「嵌人」されうるものである。すでに指摘したように、最大限に「隔域化」された資本主義国家の場合でさえ、つまり一九世紀イギリス資本主義の理念化された表現「市民国家」においてさえ、そこには少なくとも次の任務が残されていたのだ。すなわち、安定した貨幣と所有諸関係との再生産（公共の秩序の諸機能）を保障することがそれであり、さらにこれに加えて、単純商品および資本主義的生産の一般的な物質的諸条件（インフラストラクチュア等々）の再生産が挙げられなければならない。以下にみるように、戦後の支配的な発展モデルでは、国家が「経済の圏域に」特殊に嵌人されることになった。

しかし国家はさらに、もう一つ別の「機能」をもっている。すなわち国家は、その国民社会が外部と、つまり他のすべての国民とインターフェイスする際のすべての諸条件の管理を負責されているのである。もちろん国防を考えてよいが、しかしこの「外部国家」の経済的デイメンションは、フランス史の現代において人が眼前に見るように、ますます決定的な重みをもって、国家内部的な制御調整活動の諸条件の上のしかかっている。

## II フランス型フォーディズム<sup>(7)</sup>

一九六二年はたしかに、帝国主義的フランスの終焉を画する年である。この年以降、国民と国家の全注意は、フランス本土ならびにそれ固有の国際的嵌人諸条件の上に注がれた。しかし、この時期にはすでに、巨大な選択がなされていた。すなわち、先進資本主義世界すべてに共通する発展モデル——我々の名づける「フォーディズム」——の採用がそれであり、またそのヨーロッパ的構築がそれである。我々はここでまず、蓄積体制としての、またレギュラシオン様式としてのフォーディズムの重大諸特徴を再確認し、次いでそのフランス的諸特徴を算定する。というのは、このことによって我々は初めて、「国際的挑戦」に言及できるようになるからである。それに続いて、ヘゲモニー・ブロックならびにソシエタル・パラダイムの姿態を検討し、そして「フランスの奇跡」というものの独断的で、しかもすでに不均衡になっている性格を確認する。

### (1) モデルとしてのフォーディズム

蓄積体制としてのフォーディズムは、第二次世界大戦後に、諸種の矛盾との対決を通じて引き出された回答である。この諸

矛盾は、二〇世紀前半に、「テクノロジーカル・パラダイム」に導入された諸革命が引き起こした矛盾であり、またこの革命は、とりわけ工業の——したがってまた農業と第三次産業との——生産形態レベルでの革命であった。つまりフォーディズムとは、テラー主義プラス機械化である。

テラー的諸原理は、労働の「精神的」側面（研究開発、エンジニアリング、労働の「科学的」編成）と「肉体的」側面とを、最大限に分離することにある。フォーディズムは、こうしたテラー主義に加えて、共同的な技術的手腕を技術装置それ自体に組み込むものであり、構想することに代えて、「企画・構想部」を「組み立てライン」に對置するものである。だが、生産性のきわめて急激な増大は、焦眉の急として有効需要の問題を提起する。フォード的蓄積体制を特徴づけるものはまさしく、一人当たり投資（額）の急速な上昇と、同じく一人当たり消費の増大である。この二の販路の拡大は、ある内的基礎に基づいて、テクノロジーカル・パラダイムによって産み出された生産性の増大に、一つの対応物を提供するものである。我々はこの体制を、「大量消費を中心に置く内包的蓄積」と呼ぶことができる。

レギュラシオン様式については、フォーディズムは以下のものを必要条件としている。

——生産性の利益を資本と労働の間で分け合うことを保証する安定した賃労働関係の諸形態。それは何よりもまず、収入の規則性を保証しなければならない。この構造的形態の原理は、団体協約、福祉国家、社会立法である。

——企業が、技術装置の連続的な変換を逆効果なしに取り入れうるような、企業と銀行との関係の諸形態。そのようなことは、個別には「管理価格」の実施によって可能となる。

——貨幣創造の特殊な諸形態、つまり信用貨幣。これは中央銀行の統制の下で、経済社会の必要に応じて諸種の銀行が発行する。

——国家の役割の集中的拡大。国家はまず第一に、賃金関係と貨幣発行の制御調整の監督を通じて、そして第二に、もっぱら裁量的な財政政策を通じて、経済的制御調整の中に「嵌入する」ようになる。介入主義的国家の典型的な他のいくつかの構成要素（計画化、産業政策、農業構造政策、保護主義）は、ひとしくその役割を増大させる。国家がもっているこうした使命と能力は、景気に対して直接に影響を及ぼすものではないが、いずれにしてもそれは、フォード的制御調整のメカニズム——これは我々がふつう（そして不適切に）「ケインズ主義」と呼

んでいるものをなす——を保証するのである。

## (2) フランス型フォーダイズムの諸特徴

フランス型フォーダイズムの大きな特徴の第一のものは、その導入された性格、しかも独断的に導入された性格にある。レジスタンスから生まれた官僚・政治家とマーシャル・プランのアメリカ人顧問は、一九四五年に、敗れたかつてのフランスを、しかも根底的に敗れたかつてのヘゲモニー・ブロックを受け継いだ。

かつての旧フランスのヘゲモニー・ブロックは、第三共和制のそれであつて、これは、一八七一年のバリコミュニンの経験によつて、その根本的な特徴を与えられたものである。それは、産業の成長に対しては第二次的な位置しか与えず、国家を経済的機能の外に隔域化していた(ただし、職能団体の保護と関税とを除いてのことだが)。さらにそれは、労働者を進歩の外に置くものでもあつた。だからまず第一に、「持てる者のブロック」、つまり産業家—商人—農民—蓄財家のブロックなのであつて、(企業の自由よりもむしろ)所有権(財産)の擁護と、マルサス主義にきわめて類似した「社会的平静」の擁護とを標榜するものであつたのだ。それゆえフランスを近代化する努力は、ほとんど常に、賃労働を基礎とする社会的諸勢力によ

つて支持された官僚たちによつてなされたのだが、それは、一九四〇年の敗北まで苦境のうちにあつた。(キユイセル(一九八〇))。

第三共和制での支配的なテクニカル・パラダイムは、専門労働者、農民、手工業者の技術的手腕に立脚するものであり、また蓄積体制は、基本的に徐々たる外延的なものであつた。国内レギュラシオン様式は、基本的に競争的なものであつたが、多数の保護された職業、特に農民層を抱えていた。この層は、生産性が低く、一九四五年にはまだ労働力人口の四五%を占めていたのであるが、この層の再生産は、今世紀初めに定められた保護主義をもつてするメリンヌ法によつて可能だったのである。またこの時期のソシエタル・パラダイムは、「小所有者—生産者—市民—兵士」のアイデンティティーに立脚するものであり、労働者階級でさえ、また農民に浸透しつつあつた共産党でさえも、「小所有」というブルードンの理念を、つまり「自分の勘定で」仕事をし飲み食いするという理念を弁護していたのである(9)。だから「大資本」に対する反対は、自分自身の労働で裕福になつたのではない「親分たち」への対立として考えられ、行動されたのである。

しかしながら、レジスタンスから生まれた諸勢力は、こうしたモデルを敗北の基本的な原因として受け止めたのであつて、

断固として進歩の道に入るためには、過去ときっぱり縁を切りなければならなかつた。かくして技術進歩がPCFによつてさえ、合理化、テラー主義、機械化と同じこととされていた(9)。また社会進歩は、需要の効果をを通じて完全雇用を保障する、民間購買力の成長と同一視され、さらに国家の進歩とは、個別的利益の野放しの競争に抗して共同の利益を保障するものなのであつた。まさしくこれら三つの進歩が、フォーダイズムの経済モデルの構成要素なのであつて、それらはテクノロジカル・パラダイム、蓄積体制およびレギュラシオン様式としてあるのである。それ故これら三要素は、左翼諸勢力のものによつて、合意の基礎として進歩的なものに受け止められたのであつた(10)。解放時PCF書記長モリス・トレズがよく言つたような、「袖をまくりあげて喧嘩する」必要なものはやなくなつたのである。しかし、この経済社会的モデルは、ヘゲモニーを握る社会的ブロックと、明らかに安定したソシエタル・パラダイムとを欠いていたため、不完全なままでいたのであつた。

悩みの種はエリート(特権層)にあつた。エリートたちは、主として独立者農民国民センター(CNIP)(非レジスタンス運動家の党)に、また(レジスタンス運動家が指導し、公式にはドゴール將軍によつて支持された)人民共和運動(MRP)に再結集したのだが、まったく無気力であつて、ただレギュラ

シオン様式の表現にブレキをかけただけであつた(11)。それにもかかわらず、レギュラシオン様式の主要なもの(団体協約、最低賃金、社会保障)が、早くも一九四六年から、のちに我々が「開発主義派」と名づけるブロックによつて政策として確保されるようになったのである。このブロックは、紛争にまみれてのことではあるが、賃労働者を基礎とする政治的社会的諸勢力と、国家の近代主義的テクノクラート層とを再結集させたのであつた。

それゆえ国家は、持てるエリートたちに代わつて、このモデルの実施における主動因の役割を演じたのである。そしてこのことが、レギュラシオン様式に以下のような固有の姿を与えているものなのである。

★賃労働関係のきわめて中央集権的なレギュラシオン。このレギュラシオンは、アメリカの連続契約の特徴をそなえた、工場から工場への「闘争成果の伝播」に基づくものではあるが、それ以上に、団体契約と「社会進歩」の行政上および立法上の全般化のうえに立脚しているものである。つまり有給休暇の拡大、労働時間の制限、インフレ率と全国的生産性とに合せてスライドする最低賃金、労組の代表権の増大そして職業教育に対する同意等々が、この社会進歩の内容である。同様にして一九四五年に実現された社会保障制度は、

「社会的パートナー」の間の協定として制定されたものであったが、実際には国家によって管理されていたのであり、特に一九六四年以降はそうである。

水企業によってと同様に、国家によっても恒常的に「管理される」価格決定。

水一九六七年になって初めて分権化された姿で発行される信用貨幣。そしてこれもまた、主に国有化された銀行自身によって発行されるのであり、しかもその総量は国家によって統制されている。

とくに国家が、補助金と国有化を使って精神的に介入したのは、生産体制の建設そのものであった。国家は一九六七年まで、フランスに比較的完全なフォード的生産体制を、計画的な手順によって整備させてきたのである。この年以降、計画化は消えていったようであるが、しかし最強力の行政官庁ないし国有化企業（電信電話テレビ局、軍需工場、原子力エネルギー庁、SNCF〔フランス国有鉄道〕等々）は、ハイテク部門に関する研究と産業を統率する、正真正銘の「国家企業階級」を維持することができたのである。

この国家による強力な育成の帰結は、奇跡に等しい（この奇跡とその諸条件にはあとでまた触れる）。いまここで語らねばならないことは、恒久的体制としてのフォーディズムよりも、ておこう。

「開発主義派」の多数派は、逆説的だが、外部国家の主権放棄という選択に賭けたのであった。EECへの参加は、ビエール・マンデスフランスによって承認されなかったものであり（といっても彼は、第四共和制の旗手である）、ドゴール將軍も初めはこれに反対していた。またコミュニストやCNIPの老いた特権者たちも、公然とこれに反対していた。しかし、MRPとソーシャリストはこれを推進した。この決定に政治的配慮（この場合、北大西洋条約に対する配慮）が欠けていたわけではなかったのだが、そこにはまた、近代化に対する抵抗を押しつけようとする意志があった。そして「背水の陣を布こう」と叫びつつ、これまで第三共和制とメリンヌ法が体現してきたマルサスの保護主義への復帰を、自らに禁じたのであった。かくして開発主義派は、国家による強力な育成をもつてすれば、生産的な装置を幅広い競争に適合させることができる、ということに賭けたのである。農業革命の持つ諸困難を取り除くためにも、人はやはり、EECをあてにしていたのである（そしてここではすでに、外部国家は部分的に共同なものになっており、かかるものとしての外部国家が、内部国家のうえに回帰していたのであった）。六〇年代末にはその勝利が明らかとなるこの賭けに、ドゴール將軍も最終的に参加したのである。

一九六八年まで続いた、**フ・オ・デ・イ・ズ・ム**への加速的な移行である（ベルトラン（一九七九））。蓄積が工業と農業とで驚くほど進んだため、消費財産業と建築業がおこり、都市の枠内での「アメリカ的生活様式」の物質的基礎が確保された。ただし、国土の驚くべき内部変化の犠牲性においてである。農業は「トラクター革命」に押し流されて、いまや国家の保護の下に入り、農産物食品産業に統合されていった。かくして農民層は、一九六八年に、農業人口の一〇％を占めるだけとなってしまった。この信じ難い減少は、一部については、農村の過疎化（このことと含まれていることだが、建築業の驚くべき勢力がそれに伴っている）によって示され、また一部については、農村や地方の小都市において、産業的企業と第三次産業の集中とが起ったことに示されている（リビエツ（一九七七））。都市の独立生産者はむしろ、中流のサラリーマン諸階級によって急激に取って代わられていった。つまり、彼ら自身が、あるいはその子供がサラリーマンになっていったのである。それゆえ、フォーディズムのレギュレーションの諸問題に加えて、資本主義への小生産の連節に関するレギュレーションの諸問題がそこから生じたのであった。ヘゲモニー・ブロックとソシエタル・パラダイムの構成が原因となって生じた諸結果については、あとのところで触れるであろう。まずは、国際的嵌入についてひとこと言っ

ある。しかし、より仔細に検討する必要がある。

フランス型フォーディズムは実際、一九四五年の社会から生じた「低開発」によって依然特徴づけられている。だがそれでも、このフォーディズムは、熟練労働者のパーセンテージの高くない設備財産業部門を抱えていたにもかかわらず、フランスの経営者たちは、非熟練労働力の尽きざる貯蔵庫をフルに利用したのである。この非熟練労働力は、農業人口の流出、女性の賃労働者への大量進出および移民によって提供されていた。したがってフランス型フォーディズムは、全体の組み立てから見れば、「低級フォーディズム」として特殊化したのであって、外国で改良された機械を購入することさえ覚悟していた。その結果、あまり洗練されていなかった労使関係のうえに、次のような産業間関係それ自体がのしかかったのである。つまり、大企業が、その部品供給者を、「値段の釣り上げに余念のない」下請けの俗物として扱うといった産業間関係、がそれである。こうしたことのほかに、伝統的な中流諸階級が賃労働者の中に統合されていったということもあるが、これは後にみるように、一つの社会的コストなのであった。それはつまり、強いインフレ効果を持つ第三次産業の肥大となっていたのである。

このような弱点にもかかわらず、「フランス型フォーディズ



ム」は一九七〇年代まで、有利な国際的嵌入を維持することができた。といつても、それは次の二つの条件においてである。すなわち、国家は、主として公共事業に結びついたハイテク生産のための「セールスマン」として、直接に行動せねばならない。「低級な」生産に関して言えば、その生産性は労賃の低さに依存していたので、定期的な賃下げによって競争国とのインフレ率格差を消滅させることが、死活の条件となったのである。

事実、一九七三年までは、すべてがこのうえなくうまくいったのである。というのも、すべてのEEC諸国それ自身が、急速なフォード的發展を遂げ、相互の間での拘束がほとんど及ばなかったからである。だからといって、主権放棄が全面的であったというわけではない。というのは、これらの国家は依然として、相互間の平価を変える力を維持し、またノルムを用いて行政的な保護主義を実行する力も維持したのである。ことにフランスにあつては、政府需要の国民的選好という手段によつても保護主義を実行する力を保持したのである。

### (3) 開発主義の不安定なヘゲモニー

(蓄積体制という) 経済的基礎を考慮すれば、フォードイズムに合致したヘゲモニー・ブロックは、経営者と労働者との一

旧世代の文化を背負っていたにもかかわらず、鉄の腕で植民地解体とフォードイズムの近代化を推進するようになったからである。シャルル・ドゴールの戦略は簡単であり、それは次のようなものであった。すなわち、旧いパラダイムの名の下で多数派を確保すること、より正確には、この多数派が望んでいることと反対のことを経済の領域でしようとすることであり、左翼諸党の独自の企図——つまり国家によつて組織された大量生産・大量消費の成長——を実現させることによつて労働者の反対を解体させることであつた。かくして、「フランスの威信」を高めるといふドゴールの主張のおかげで、一つの商品が別の商品としてまかり通ることができたのである。

フォード的ブロックもまた、まったく不安定なものであつた。その主要な社会的基礎が対立状態にあつたのである。このブロックの指導的集団である国家高級テクノクライト層は、この対立の圧力を利用して、支配階級の近視眼的な利害に對立する路線を、政権の選挙綱領として通用させようとしていた。政権は徐々に、「反対派の中道主義」をその多数派の中に取り込んでいった。言い換えれば、古い名士たちがついに、フォードイズムを是とするように転向したのである。それを示すのが、ジスカール・デスタンの指揮する独立共和派の党(CNIPの分派)である。

—技術者や技能者といつた中核的な中継者集団をともなつた—生産主義的な妥協をめぐつて結成されるはずである。おなじく最も適合したソシエタル・パラダイムは、「サラリーマン社会」である(12)。このサラリーマン社会とは、技術的な職階制を受け入れることを条件に、各人が福祉と完全雇用を確保するような社会である。こういう状態がまさに、北欧諸国で見られる状態であつて、そこでは社会民主主義が、フォードイズムの早咲きの定着を進めてきたのである。そしてこのようなことが、それが、「成長の利益配分」を理論化した、モネからピエール・マッセをへてヒルシュにいたる、計画化官僚の提唱したところのものなのである。そしてまた、これこそが賃労働者、つまり労働者ないしインテリが、結局のところ望んだことでもあつたのだ。しかし一九五〇年代には、このようなブロックを支持する多数派は存在しなかつたのである。「財産家としての生産者」が掲げる保守主義的なパラダイムに忠実であつた経営者、農民層、都市独立生産者層は、フォードイズムを拒否したのであつて、それ固有の社会的獲得物も社会保障も拒否したのである。そこから第四共和制の不安定性が生じ、マンデスフランスとフェリックス・ジェラルの挫折も起こつたのだ。

一人の將軍を政権の座につかせたアルジェの反乱は、まさしく奇跡的な「理性の狡智」であつた。というのは、この將軍はしかし、このすばらしい政治戦略は、それに適合するレギュラシオン様式を装備することなしには、またフォード的ソシエタル・パラダイムを退化させることなしには、維持されえないものである。ここで三つの主要な例をあげよう。

労働者(あるいは、一つの社会集団が、あるパラダイムに忠実であり続けながら、そのパラダイムを遂行する人々と敵対することがあるとすれば、それはいかにして可能か)。これまでコミュニストのイデオロギーの指導に広く同調してきた労働者階級は、諸種の私利私欲が昔ながらにアメリカ帝国主義の従属下に社会的利益を十分増大させることなく生産諸力の成長を拘束していることに對して、反対派としてふるまってきた。ところがドゴール派は、この生産力の発展に民族主義的、生産主義的そして国家主義的な表現を与えることによつて、これに応えようとした。しかもこうすることによつてドゴール主義者は、共産党(および現代左翼)の指導をしばしば窮地に追い込んだのであつた。

中堅層(あるいは一つの集団は、それ自身のアイデンティティを、いかにして、ヘゲモニー・ブロック構築の運動そのものにおいて構成しうるのか)。技術者と技能者たちは、フォード主義的モデルにおける資本主義的支配の被支配者層であるが、彼らはこのモデルに照応したヘゲモニー・ブロックの中継

者集団の役割を特に果たすものである。その社会的地位からして、彼らが自己のアイデンティティを享受できるのは、あるいは自由職業家として、あるいは企業の指導に「同調する」独立労働者としてである（そしてそのようなものこそ、古いパラダイムにおける彼らのアイデンティティをなすものであった）。彼らはまた、経営権力から権限を託された作用主体として、あるいは生産的労働者層の熟練部分としてそのアイデンティティを享受するものである。ルック・ポルタンスキー（一九八二）はまさに、こうしたことを描いている。（特に定年退職の自律性と税制の確立をめざす）複合的な制度的・文化的諸装置が、いかにして彼ら中堅層に——しかも自由職業家や文化的資本の所有者としてのアイデンティティを要求し続ける彼らに——フォード主義的賃労働者の地位をあっさり受け入れさせることができたのか、ということに彼は美事に描きあげている。ドゴール主義者は、家産としての資本に対抗することのよるな「メリットクラシー」を強調した。「中堅層 *cadres*」という何でも入る社会的カテゴリーは、旧ブチブル階級の子孫である一部名士を吸収しつつその数を増していったのだが、実はこれら名士たちは、服属した賃労働者に対する地位と収入の法外な格差<sup>(8)</sup>を以って、自分たちの諸権利を行使する術を心得ていたのである。こうしたことが本来もっている全てのインフ

レ効果によって、この中堅層はかくしてフォード的消費モデルの前衛となった。そして同時にまた、社会的ブロックとソシエタル・パラダイムの「科学的な」正当性を延べ広める大司祭の階層となったのである。そしてこのことは、コミュニストから熱烈な歓迎を受けただけでなく、近代主義的な政治社会学のすべてからも承認されたのである。

農民（あるいは人）は、いかにしてその地位を変えることにし、ある一つのヘゲモニー・ブロックから他のそれへと移行行くことができるのであろうか。小農業生産者は、次の三つの局面で自らを認知することができる。すなわち、(1)小所有者として、(2)小企業家として、(3)労働者として。アルカイックなブロックの中では、彼らは明らかに「分配を要求する者」に対立する所有者として自己を考えていた。また彼らは、自分のことをフォードイズムの枠内での「準賃労働者」として考えたかもしれない。というのは、農産物食品工業との契約が彼らに対して、自分で装備を整えることを、借金をすることを、統合されることを強制したからである。しかし、文化水準での農業革命の後に生まれた人々、特に青年カトリック農民同盟の推進者たちが、農民たちに自分たちは「ダイナミックな小経営者」であるということに納得させることができた。この時点で国家は複雑な方策を採用する。すなわち、世界一の銀行であった農業信用金

庫をはじめとする巨大な諸協働組合は、農民たちに自分たちが本当に小企業家であり続けているという印象を与え続けたのである。しかし、彼ら農民たちの収入とその減債基金を保障する必要があるため、ドゴール政権はEECから巨大な農産物価格支持制度の実施を勝ち取ったのである（この制度は直接には収入維持制度ではなかった）。資本主義へのこの小生産の接合をめぐる巨大なレギュレーション装置の管理が、この農民層という職業そのものに、委ねられたのである。それゆえ、フォードイズムの中において農民層は、自己を一つの職業団体<sup>(9)</sup>として組織したのであり、社会の他の部分から「収入の均等性の保障」を奪いとったのであった。この「収入の均等性の保障」に対する補償金は、フランス農民層の授権者として行動する歴代農林大臣がブリュッセルから引き出したのであるが、そうするにあたっては、彼らは、その行政に服属する農民たちの時として暴力的でさえある動員に力を借りたのである。

かくして、ドゴール主義国家はフォードイズムを構築したのであって、そうするには、その自然的基礎をなすかもしれないぬものを権力の外におくことをあえてしたし、他方また、フォードイズムに統合される社会諸集団の上に依拠しようとした。だがそれはコーポラティズムの形式においてであった。かくしてフォード的コンセンサスは、テクノクラートの国家が調停す

る、諸種の職業団体的権利要求の合成結果の形をとったのである。したがって、このようなテクノクラートの国家の市民社会に対する自律性は、最大限にゆきつくところ、すなわち「準ポナバルティズム」になると思われた。

### III 数次の割れ目

最初の動揺は六八年五月の危機であった。それは経済的危機以外に文化的危機であり、ヘゲモニーの危機であり、パラダイムの危機であった。その五年後には、フランスは顔つきを変え、手持ちのカードを変えた。つまり、社会民主主義に向かつて成熟していったのである。そのとき、この社会民主主義（その伝統的形態では）決定的に不可能にする経済危機がやってきたのである。

#### (1) 一九六八年五月の三重危機

六八年五月の危機は、フォードイズムのレギュレーション様式「内での」一つの危機であり、同時にフォードイズムへの過渡期の危機であり、そして最初の反フォードイズムの危機であった。

フォードイズムのレギュレーションにおける危機とは、信用で

賄われてきたアルジェリア戦争がもたらした財政不均衡を解消しようとした「ドゥブレ・ジスカールの安定化政策」が、ケインズ主義に固有な財政欠陥によって、また民需の不足に基づく雇用不足によって失敗に終わったことである。史上最大の労働ストの結果、「賃上げ要求の粉砕」は解決されたが、賃金が飛躍的に伸びたため、労働者階級は消費社会の中に引き入れられた。

フォーディズム的レギュラシオンへの過渡期の危機とは、同じ時期に、六八年六月のゲルネル協定が結ばれて、賃金調整（成長に基づく最低賃金制度「SMIC」）の創設、企業内組合支部の承認、等々）が完成したことである。だがより広く言えば、教育を受けたブチ・ブルジョアたちの大反乱によって、未完のパラダイム革命に決着をつける必要性が示されたことである。ドゴール主義が押しつける道徳秩序はもうたくさんだ、農村の価値も進歩ナバルティズムの国家ももうたくさんだ。このことに加えて、社会民主主義の力量不足が物質的な恐慌に重なり合っていた。大学は、伝来的ブチ・ブルジョアたちが自由職業家や教授団員（<sup>15</sup>）に昇進するための社会的装置として常に機能してきた。世襲財産のブチ・ブルジョアジーを知力のブチ・ブルジョアジーに転換させるといふ、大学の新しい機能が、価値低下した卒業証書を出す大衆大学へと大学を作り変えた。こ

うしたことが、学生たちの間にストレスを積もらせていったのである。

しかし、フランス型フォーディズムの過剰な国家主義に対する、また知的特権者の過剰なエリート主義に対するこの反乱によって、よりラディカルな反乱への突破口が開かれた。このラディカルな反乱は、フォーディズムにおいて国家や職階制が果たす役割の過剰に対してではなく、その正常状態に対して、したがって社会民主主義に対しても、したがって社会民主主義に対しても、まさしく異議申し立てをおこなったのである。その結果、若者と左翼の政治諸勢力との間に復旧不能な亀裂が生じた。実は、この左翼政治諸勢力は、純粹かつ単純なフォーディズムを熱望し、かつそれをこの六月に押しつけようとしていたのだ。これと同様に、いくつかの労働ストでは、工場におけるフォード的秩序の見直しが始まっていた。

したがって六八年五月に続く数年というものは、かなりパラドキシカルなものとなった。なんと、ドゴール派とボンビドー派それにジスカール派の大臣たちが躍起になって、フランス社会の社会民主主義化を制度レベルで完成させようとしたのである。だが、これらの政府を底ざさえる選挙人たちは常に不満の声を上げていた。このような事態をシャパンデルマスは「袋小路に入った社会」と名づけた。シャパンデルマスが熱望した

「新たな社会」は、一九七二年に共同政府綱領を調印した左翼諸党によってより適格的に提唱された。最後に、工場や第三次産業の底辺労働者や青年層の中では、フォーディズムの恩恵に対する期待とフォーディズムに固有な過剰の国家主義に対する「個人的」忌避とが結合していた。こうしたすべてのことが、

一九七三年、もつと遅れては一九七四年の左翼の勝利を導き出すはずであった。しかし、左翼同盟の中では依然PCFが力を持っていたので、右翼が一九七四年に勝利をむしり取ることができた。PCFがこの左翼同盟を裏切ったため、一九七八年には再び右翼が勝利を獲得することになった。左翼が政権につくことができたのは、やっと一九八一年になってであって、そのときフランス・ミッテランは、「社会学的多数派を結集した政治的多数派」に挨拶を送った。だがこれは経済的・イデオロギー的にはあまりにも遅かった。つまりフォーディズムそのもの

のが、国際的レベルにおいても、特殊フランスにおいても、危機に入ったのである。

(2) フォーディズムの危機 (16)

まず最初に、テクノロジーカル・パラダイムが息切れとなった。一人当たり投資額の急速な増大に比べれば、もはや減少する生産性の利益しか生まれてこない。その結果、利潤率の低下が生じ、それは一定の時間的遅れをもって蓄積そのものの減速要因になったのである。一九七四年には石油地代の急激な上昇がさらに問題を悪化させ、失業が増大したのだが、福祉国家の安全網（とくに失業手当）のおかげで不況の累積は阻止された。しかし、福祉国家そのものが、この生産システムによって賄われている以上、生産システムの収益性はそのために益々衰え、成長は七〇年代を通じてスタグフレーションに変わった。

● 混沌の時代に、確かな座標軸を提示する！

岩波講座 宇沢弘文・河合肇雄・藤沢令夫・渡辺謙

私権期に生きる人間

全10巻 別巻1

世紀の末葉から21世紀に向けて私権はいかに生きればよいのか。基本的な知見を各学問分野の最高の頭脳を結集して総合的に提供する。



AS判上製・カバー・三〇〇頁・各巻月報付。毎月11日に巻ずつ刊行の予定。

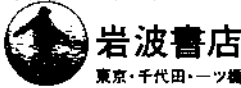
文化とは

310巻 第三巻 伝統とポストモダンのはざまに文化のあり方を問う。三〇四頁 定価二五〇円(税込)

既刊 1 生命とは 定価二〇〇円(税込) 3 心とは 定価二〇〇円(税込)

予約申込期限 9月15日

予約者のみにお届けいたします



岩波書店 東京・千代田・一ツ橋

これに加うるに、生産と市場の国際化が加速された。それはまず先進国内部においてであったが、次いでそれは第三世界にも向かった。統合のこうした進展は、レギュラシオンの一国的な性格と矛盾するようになるのであるが、とくにEEC内部ではそうであった。貿易収支の均衡を確保し、高利潤率を回復するために、政府や経営者は（特に七〇年代後半以降）国内の買下げに努めたのであるが、それは国内市場を縮小させ、ついには世界的販路を縮小させるのであった。一九七九年以来、この「ひとり勝手な保護主義」政策が勝利し、またケインズ主義に対してマネタリズムが勝利を収め、かくしてフォーディズムの「黄金時代」に終止符が打たれたのである。

ジスカーール・デスタン大統領とその首相ジャック・シラクは、ほとんど全ての有名な論説記者ならびに多数の経営者とともに、フォーディズムのパラダイムに同調していたので、一九七四年の石油危機にあたっては良きケインジアンとして対応した。つまり有効需要の安定化を確保し、また賃金収入を犠牲にしてまで国民所得を急激に組みかえようとはしなかった。そのようなことは逆に、失業保険の適用範囲がひろげられ、購売力の膨張は緩慢になりながらも持続したのである。また「大規模契約」やフラン切り下げによって貿易収支の維持が図られた。だがこうした対応は、今回の危機が供給から生じていた

（つまり産業パラダイムの危機だ）ということを無視するものであり、また、国際化が購買力上昇によるケインズの景気回復を妨げていた、ということは無視するものであった。一九七六年にレイモン・パールが主管者になったことは、ジャック・シラクの挫折を公式に確認することにほかならなかった。

(1) 「レギュラシオン学派」の基礎テキストはアクリエッタ（一九七六）、ボワイエおよびミストラル（一九七八）、リビエツツ（一九七九、一九八五a）である。私は（一九八五b、一九八八）のなかで、レギュラシオン学派の基礎概念を啓蒙的に呈示することを、またジェインソンおよびリビエツツ（一九八七）のなかでは、その社会文化的起源を説明することを、それぞれ試みている。私の著作（一九八四a）は、本テキストの方法を黙示的ではあるが、すでに実行しており、そしてより明示的には、（ソシエタル）「パラダイム」の概念を導入している報告論文（一九八六a）の中ですでに私はそれを実行している。しかし今日の形では、ジェインソン・ジェンソンとの共同の影絵が重要となってくる。ジェンソンは、政治的表象の領域に適當な諸概念を導入した（たとえば、（一九八六）のち、同じ方法論を彼女のカナダ現代史研究に 응용している。

(2) これらの地位は、それぞれの経済的な生活諸条件によって単純に規定された「社会諸階級」が占めるというのではない。同じ諸階級を再編成する二つの社会的ブロックが、非常に異なっているということもありうるのだ。というのは、そのブロック内部にムに向かって明確化される両極性に意味を与えるのも、やはりソシエタル・パラダイムなのである（ルベン主義者やエコロジストの選挙人たちは、自分のことを「右翼でも左翼でもない」と言っている）。

(5) 国家のもつ「制御調整者」という概念は、（サエーパーの作品を越えて）マルクスとエンゲルスの作品にその気高い文字を見出すのだが、レーニン主義の伝統の中では、「道具主義」（支配階級が被支配階級を屈服させる道具）的な概念が、この概念を覆い隠している。リビエツツ（一九八六b）をみよ。

(6) この創始者たちは、レギュラシオン学派にきわめて近いところにいる（次を見よ。ドゥロルムおよびアンドレ（一九八三）、ド

は、物質的な妥協のシステムと同時に、アイデンティティの表象システムが存在するからである。ここで、「異性体」を思い浮かべてもよいだろう。異性体とは化学上の分子のことだが、それは、同じ種類や数の原子によって構成されているが、原子の結びつきが相互にきわめて異なっている（ため、互いに性質を異にする）諸分子をいう（メチルエーテルとエチルアルコールなど）。こうした理由から、私は次のところで「階級」ではなく「集団」について語るのだが、それはブーランサス（一九六八）によってなされたグラムシの読解を、かなり早くから利用してきたことによるのである。

(3) 「ハビトゥス」という概念が、ここでアルデュエ（一九八〇）の意味において受け入れられている。それは、レギュラシオン様式内部で「その場にふさわしい態度をとる」ような、社会的に組み立てられた諸個体の性向をいう。

(4) パラダイムという語は、クーン（一九七〇）が認識論に役立てるため援用したのと同様に、文法論から援用してきたものである。それは良いことに、二つの観念を同時に取り込むことができる。一つのパラダイム（たとえば「色」のそのような）は、無限の變化（赤から紫まで）をもちながら、それでいて限定的なものである（塩辛さは色ではない）。ソシエタル・パラダイムは、共通の諸原理によって規定されているのだが、この諸原理は、多数のヴァリアントを持ち、また改造の余地を常に残している。そういうわけで、ソシエタル・パラダイムは自己を闘争的なものとして表わす。たとえば、右翼／左翼というような、各々のパラダイ

# 世界経済評論

9月号 定価620円

- アルシユ・サミットの成果と日本：國廣道彦
- ブラザバ高の仕組み：松永嘉夫
- アフリカの経済開発と構造調整：小浜裕久
- 国家の経営資源吸収能力と：江夏健一
- 多国籍企業の戦略転換能力：斎藤優
- 技術革新と世界経済：新井明
- 西歐近代化の尺度で測れない中国：岸真清
- アジアの時代への新たな対応：金森久雄
- 「EC」統合市場のすべて：相原光
- 「海外直接投資のマクロ分析」

世界経済研究協会 東京都港区新橋10-10-1 電話 501-1321

ウロム(一九八四)。ここで私は、「制度化された妥協」、「内部国家／外部国家」、「隔域国家／嵌入国家」といった諸概念を彼らから援用している。

(7) 以下の考察は、次に挙げるものと同様な理論的な着想に立つ、より具体的な分析にもとづいている。ドゥロムおよびアン・ドレ(一九八三)、フリダソンおよびストゥロー(一九八七)、グラノー(一九八三、一九八八)、リビエッツ(一九八四)。

(8) 兩大戦間の「詩的に実在主義的な」映画は、このゾシエタル・パラダイムを完璧に例証している。

(9) それにもかかわらずPCFの中には、そして特にCGTの中には、きわめて頑強な無政府主義的サンジカリズムの伝統が存在していたのであり、それは、その「プロ根性」とその技術的な手腕とを自慢していた。

(10) コミュニストたる歴史家J・ブヴィエと「高級官僚」F・ブロック・レンヌ(一九八六)の非常に感動的な対話は、完全にこの合致を示している。レジスタンスの期待は裏切られたのだ、とまず評し、次いで「復興」を口にするこのコミュニストに対して、この高級官僚は根気よく次のように説明している。そこには期待されていたことなど何もなかった、一九七三年までに実現されること期待されることなども何もなかった。

(11) ビエール・マンデスフランスによる現代主義の政府に対して弾劾の辞を投げかけたのは、MRPのジャン・ルカニエその人である。

(12) この表現(「サラリーマン社会」)は、アグリエッタおよびプロ

ンデル(一九八四)にしたがったものであるが、彼らの主要な欠陥は、フランスがサラリーマン社会のパラダイムのうちにあると、かなり過大評価していることである。

(13) こうした格差を、これに対応する北ヨーロッパでの、とくに西独での格差を比較するとき、その法外さは明らかである。

(14) 注意せよ。政治学のフランス語化した英語に汚染されないフランス人のために言っておく。この語(職業団体corporation)も「コーポラティズム」という語も、国家の仲裁の下で他と区別される一つの表象を有する諸種の社会集団間の寡占的な協定形態を意味するのではない。そうではなくて、それは逆に、他の全ての職業組織——国内制調整者の責任を持つ国家から権限を託されているかのように振舞うこの組織——のなかで、諸種の社会集団が混合することを意味する。だからフォード主義的レギュレーションは、コーポラティズム的レギュレーションではない(リビエッツ(一九八六))。

(15) 教員団体を通じての社会的昇進(G・ボンビドゥー一家の歩み)がこれを例証している)は、第三共和制ブロックの中心的な歯車の一つでさえある。

(16) フォーディズムの二重の危機(フォーディズムに固有なパラダイムの危機と、フォーディズムの国際化に起因する危機)に対する詳細な経済的分析については、グリーン他(一九八八)、リビエッツ(一九八四、一九八五a)をみよ。

(文献リストは次号に掲載)